

未来評論家

【ショートショート作品集】

5時45分

朝の光が眩しい。今、5時45分。

僕は急いで着替え、外に出る。愛犬のケンスケを散歩に連れていかなければならぬからだ。

「ケンスケ」僕は愛犬に声をかける。

ケンスケは嬉しそうに尻尾を振る。

散歩を終えると朝食を取る。そして学校へ行く。今日は、期末試験の最終日、半日で試験は終わる。

帰ったら、試験勉強の為、我慢し録画して置いたお気に入り番組を観るつもりだ。

善戦した。自分では、そう思っている。

さあ、帰ってゆっくりテレビでも観るか。

帰宅後、テレビをつける。録画した番組を観る為つけたのだが、気になるニュースが流れていた。

「・・・と言うことで、犬や猫などのペットに喋らせることが可能になりました。もちろん、脳波を読みとるので、ペットの知的レベルに合わせて喋れる言葉には制限があります」アナウンサーが喋っていた。

衝撃だった。

そんなことが出来るのか、素晴らしい。

5時45分。少し曇り空だ。

僕は着替えて外へ出る。もちろん、ケンスケの散歩の為だ！

「遅かったな！」ケンスケだ。

犬用の音声発生装置を付けている。犬は敬語は喋れない。

そんなことはいい。

相変わらず尻尾を振っている。愛想笑いではなく、愛想尻尾振りかと一瞬考えてしまう。

「早く行くぞ！」また、ケンスケだ。

「わかった」と僕は答える。

犬は元々人間の言葉のある程度理解出来る。

ケンスケを連れて散歩をする。

前と同じだ。ただ、ケンスケが色々喋ってくる。

喋れない時でも何の不都合もなかったのに・・・

判っている。ケンスケのせいではない。

犬は何も変わっていない。

音声発生装置を外す。もう、使うこともないだろう。

目覚めればそこには知らない顔があった。

「どうですか？」

「気分は悪くないですか？」

医者らしい、白衣を着ている。

それぐらいは分かる。ただ、それ以外は何も分からない。

自分の名前さえも・・・。

「無理に思い出さなくてもいいですよ！徐々に記憶は回復しますから」
私は生来、横着な性格だったらしい、思い出す試みをやめた。

2～3日が過ぎた。窓の無い病室、私が今いる場所だ。

窓の無い理由は後で分かる。

この前の医者が診察に来た。30歳前後だろうか私よりも少し年上だ。

「記憶が戻りましたか？」

「はい」

「ここまでは、予想通りです。が、なにせ貴方が最初の1人ですから」

「最初の1人？」と私は疑問を口にする。

「ええ、高額な費用が必要な為、普通の患者さんには無理ですし、実績が無いので患者の絶対数が少ないですしね」

「それに厄介な病気の患者さんが多いですから」彼は続けて言った。

診察を終えて病室を出る時。

「何か困ったことがあったら言って下さいよ。病気以外のことでも。身内ですから」

「身内？」記憶に無い顔を見る。

「そうですよ。おじさん」

え！ と思いここで思い当たる。

私は不治の病になり、体の代謝を著しく下げる措置を取ったのだ。俗に言われる人工冬眠。
再び医者顔を見る。面影がある！

「龍之介か！」

彼はうなづく。

当時、龍之介は9歳だったはず。20年過も過ぎたか。

惜しい30年経っていた。

龍之介によると、30年後の今、アンチエイジングのいいサプリメントがあるらしい。

こうして、叔父甥の再開は終了した。

窓がなかった理由、あれはなかったのではなく、板で塞いでいたもの。

外の景色は私が知っている東京の30年後の姿、見たら記憶の回復が遅れる可能性があるかもしれないと言う龍之介の配慮。

しばらくして退院の日。不治の病もあつという間に治った。

もっとも、治るから起こしただろうけれど・・・。

龍之介が病室へ尋ねてくる。

「叔父さん。退院おめでとうございます。住む家はこちらで案内します」
甥だから用意してくれた訳ではない。

人工冬眠中の資産の管理及び目覚めた後のサポートは料金に入っている。
何せこっちは浦島太郎状態だから。

1週間後、検診の為、病院へ行った。担当医は龍之介。

「大丈夫です」

「後は定期検診だけ受けて下さい」

私が午前中最後の患者だった。一緒に昼食へ行った。

「仕事？」彼は聞き返した。

私は答える。「生活には困らないのだが、生活にメリハリをつけないと」

彼は言い難くそうに言った。

「今の時代、仕事を持っているのは、芸術家、何らかの専門か、後は企業の経営者ぐらいですよ。
ほとんどの作業は自動化されていますから」

彼は続けて言う。「亡くなった祖父は一流の経営者だったけど、叔父さんはそうじゃない・・・普通の人だ」

「普通の人はどうしている？」と私。

「生活は保証されていますよ。皆んな趣味に時間を使っています」

家に帰った。そのことを考えた。

そして、数ヶ月後、自分を取り巻く現在が見えてきた。

30年前と変わっていることも多くあった。

その差異について、最新のコミュニケーションツールを使って呟いた、くる日もくる日も・・・

現在、私は現在評論家と言われている。

30年前と現在を比較して評論しているからだ。もっとも、30年を知っている人は大勢いる。
でも、30年の意識のまま現在にいるのは私だけだ。

だから、私の意識では、私は『未来評論家』だ！

ただ、一つだけ心配ごとがある。

人工冬眠から別の患者が目覚めないか。

せっかく、得られたこの仕事、『未来評論家』が奪われないかと・・・。

僕は宇宙船のパイロット。

ある惑星に到着した。地球ととても良く似た環境だ。

しかも、マスクなしで呼吸可能な大気、若干CO₂が多いが地球と酷似している。

調査飛行に出て3年、やっと知的生命体の存在が期待できる惑星を見つけた。

3年、長かった！たった1人の探索飛行は孤独と退屈と忍耐の日々だった！

パイロット1人だけと言うのは理由がある、長期の探索飛行において、乗組員が1人増えることは、費用的・技術的に大きな負担になる。

そう言う事で、1人単調な旅を続けて来た。

もっとも、危険な目にも合った。小惑星と接触した時はもう駄目かと思った。

まあ、その話はまたの機会にでも。今は惑星の調査が先だ。

宇宙船を出ると、我々と良く似た生命体が出迎えてくれた。何か喋っている。

僕は言語解析装置のスイッチを入れた。目眩がした。そして・・・

目覚めた時、この星の病院らしきところにいた。

「お手数をおかけします」と僕はナースらしい女に声をかけた。

女は答えない。ロボットらしい。それにしても良くできたロボットだ。この惑星の住人にそっくりだ。

「チーフ！なぜ、ロボットを入院させたのですか？」

「メモリデータを調べたところ、彼は自分を人間だと思っている。多分、小惑星との接触事故が原因だ」

「自分が人間！それだと理論的に合わないところが出てくるのではないですか？」

「それに合わせて、メモリデータが微妙に修正されている」

「じゃ、倒れた原因は？」続けて聞く若い職員。

「言語解析装置のスイッチが入った時にソフトにエラー出た。それだけではない、彼はもうポンコツだよ」

「廃棄処分ですか？」

「メモリデータは読み取ったから、本来は廃棄処分だが、彼はいまや、国民的ヒーローだ！世論が許さない！」

「どうされるのですか？」

「彼は自分が人間であるという風にメモリを修正していた。だから、逆の修正をするのだ。ロボットであるとな」

「でも、どこが修正されたか分からないではないですか？」

「メモリデータをチェックするのだ。300年分のな！もっとも、彼は3年だと思ってい

るが・・・」

チーフはため息をついた、300年前と比べてCO₂が多くなっている空気に向かって！

夕日

夕日が綺麗だ！

夕日を見て彼は思う。

もうすぐ、太陽は赤色巨星になり、地球は滅びるんだなと。

もっとも、それが彼の世代か子孫の世代かは分からない。だから、こうして落ち着いていられる。

庭から、子供達が遊びから帰って来るのが見える。夕食にしよう。

彼は子供達に尻尾を上げて合図した。

また、彼は思う。この太陽系が出来て100億年。

彼の先祖は1千万年程前に移住して来たと言う伝説がある。

また、この地球の先住民の文明が有り、地球が滅びる前に他の星系に移住して行ったという伝説もある。

どちらの話もつくり話だろう・・・

フリーライター

俺はフリーライター。扱うネタは政治家の不正。
自分では、不正追い暴くことで社会に貢献しているつもりだ。
しかし、人によっては、政治家のスキャンダルを飯の種にしているハイエナと言う奴もいる。
俺としては甚だ心外だ！
それはさて置き、ついさっき、ある政治家の不正の証拠をつかんだどこだ！
だが、ここでドジを踏み、非常階段を駆け降りている最中・・・足を踏み外した。
そのまま、下の階の踊り場へ落ちる。

気がついた時はベッドの上、集中治療室らしい。医者が居る。俺は口を動かさずとした・・・動かない。
次に体を動かそうとする。やはり、動かない。俺には伝えなければならないことがある！
あの政治家の悪事を見過ごす訳にはいかない！
力を振り絞る、そして「うう・・・」。ここで力が尽きる。
そして、動けなくなる、永遠に！

「やっと、彼が言いたかったことが分かったよ！」と一人の医者が言う。
「例の3年植物状態の患者ですか？この病院に運ばれて来てすぐ、何か伝えようとして、それきり動けなくなった」と別の医者。
続けて聞く。
「で！何だったですか最新の装置、脳波スキャン装置で読み取ったのですよね」
「まったく、あの装置が発明されて3年間、気になっていたことが分かると思ったのだが・・・」
「分からなかった？」
「分かったよ。・・・でもどうにもならない！」
医者は心の中で呟く。
(相手が悪い！なんせ、今やこの国の独裁者だから・・・)

タイムマシン

「完成したよ」と博士は言った。

それは、少し変わった車のように見えた。

僕は博士に聞いた。

「これはどうやって動かすのですか？」

「何、簡単だよ。行きたい時代と場所を入力してそこのボタンを押すだけだ」

僕は博士に言った。

「博士は1954年、S町で生まれでしたね？」

思わず頷く博士。

「じゃあ、行って来ます」ボタンを押した。

博士の生まれた家に行った。留守のようだった。

諦めて帰ろうとすると何やら焦げ臭いにおいがした。火事？

そして、赤ん坊の泣き声！

仕方ない、窓ガラスを割って中に入ろう。急いで庭に回り、窓をガラスを割ろうとする。

しかし、窓は少し開けられていた。僕は窓を全開にして中に入る。赤ん坊が居た。

そして、ストーブ。ストーブが不完全燃焼していた。

後頭部に衝撃があった！何かで殴られたらしい。

息苦しさに目覚めた。まだ、時間はそう経っていないみたいだ。窓が閉まっている！

ストーブを止め窓を開ける。

しばらく放心状態、玄関の方でもの音がした、この家の住人が帰って来たらしい。

僕は急いで窓から外へ出る。

僕は何も悪い事はしていないので逃げる必要は無いのだが、何分この時代で身分を証明するものが無い。

「殴られたって？」と博士。

元の時代である。状況を詳しく説明すると博士は、少し考え込み、思い出したように言った。

「母親に聞いたことがある。赤ん坊の時に私をストーブの事故で殺しかけたことがあると。隣りの家に町内会の回覧版を届けに行った時、ストーブを消し忘れたらしい。幸い母は換気の為に窓を少し開けるのが習慣だった。それで、助かったらしい」

「隣りの家に行ったしては、時間がかかっていますね？」

「恐らく、立ち話でもしていたんだろ」

嫌な予感がした。そして、博士に言った。

「博士の命を狙っての犯行ではないですか？」

「赤ん坊の私が人に恨まれるとは思えない」

「赤ん坊ではなく、大人の博士を狙ったのではないですか？」

「例えば、博士の研究が邪魔とか。そうタイムマシンだ！」と僕は言った。
さらに言う。

「犯人は僕と同じタイムトラベラーだ！」
博士はそれを受けて言う。

「では、犯人はまだあの時代にいる確率が高い」
「なぜですか？」

「犯人があの時代の人間なら、当然、あの時代にいる。タイムトラベラーでも、あの時代に止まっているかもしれない」
疑問に思い僕は聞く。

「それはなぜですか？」
「タイムマシンは一度、時間を往復すると取り替えなければならいパーツが多く存在する。それゆえ連続では運転出来ない。少なくとも私が作ったものはそうだ」
僕には確信があった。犯人はあの時代の人間ではない。

もし犯人があの時代の人間なら、それは既に過去に起こったことで、博士は死んでいたはずだ。
が！博士は生きている。

もっとも、犯人があの時代に止まっているかは、甚だ疑問だが他にあてがない。
僕は博士に聞いた。

「母親が帰って来た後、どうなりました」
「救急車で運ばれ、入院したらしい」
「どこの病院か分かりますか？」
「あの町で、救急病院と言えはE病院かF病院。いや、E病院は当時ないか」
僕は、再びタイムマシンへ。

とその時、
「君は人の話を聞いていないのかね？タイムマシンは連続運転は出来ない」
そうだった！

一週間後、再びタイムマシンの前。病院は分かったF病院だ。
おまけに病室も調べた。僕はそういうことを調べるが得意なのだ。
タイムマシンに目標の時代と場所を入力する。
まさか、病室に現れる訳には行かないので、少し離れた場所を指定した。

ここは、赤ん坊の病室。
通路の角に隠れて犯人が現れるのを待つ。
犯人が突然現れた。驚いている間に病室に入っていった。僕は入り口に移動し隠れる。
犯人が素早く、母親を銃みたいもので撃つ。
「何をするんだ！」しまった！こっちは丸腰だ！
「安心しろ！殺してはいない！気絶しているだけだ！」と犯人が意外にも答える。

犯人と対峙した。どこかで見たことがある。記憶にある！

「なぜ赤ん坊を狙う？その赤ん坊が後にタイムマシンを発明するからか？」と僕。

犯人は言った。

「タイムマシンは関係ない。彼はタイムマシンを発明した3年後、時空間エネルギーを応用した兵器を開発する。その兵器の為に未来は滅亡の危機にある！」

犯人は銃の目盛りを操作する。出力を上げたらしい。そして、赤ん坊に銃口を・・・

「そこまでだ！」警官に似た制服を着た男が銃を構えていた。

犯人はやはり制服を着た別の男に連行されて行った。

男達は未来から来たらしい。

男達の未来では、博士はタイムマシンを作った後、時空間エネルギー兵器は作らなかつたらしい。

犯人の未来とは異なる。いわゆる、パラレルワールド、難しいことは分からない。

別れ際、リーダーらしき男に言った。

「犯人とどこかで会ったことが・・・記憶にあります！」

男は否定した。

「それはない。しかし・・・」

「しかし、何です？」気になって聞いた。

「我々の調査では、犯人はパラレルワールドの別の君だ！」

「しかし、犯人は・・・」言い淀んでしまった。

「そう犯人は女だ！あっちの世界ではそうらしい」

驚いた！僕は3年後には、性転換しているのか？

それとも、パラレルワールドでは性別が異なるのか？

聞こうとしたが、男達はもういない、自分の時代に帰つたらしい。

仕方ない、僕も帰ろう。

3年後には僕自身の問題も含めて色々分かるだろう。

長靴をはいて

行き交う人が私を指差し驚いている。私が長靴をはいているのが珍しいのだろ。そう私は長靴をはいた猫のモデルになった猫である。物語の猫が知恵を使い、最後には貴族になり、遊び以外ではネズミを捕まえなくなったが、私の場合は少し事情が異なる。私の場合、普通のネズミは捕まえれないがある特定のネズミは捕まえる。これが私の仕事である。

そのネズミがいるところはあらかじめ分かっている。私は一軒の家を訪問した。この家の主婦らしき女に話しかける。

「ネズミの駆除はいかがですか？もちろん無料ですよ！」
女は猫が喋ったので、驚いて様子だったが、私の長靴を見て納得したようだ。長靴をはいた猫が人間の言葉を喋る噂を耳にしたことがあるのだろう。

「じゃあ！お願いするわ」女は言った。
私は家に入りネズミ捕獲装置をセットした。
ネズミが3匹捕獲された。もちろん、普通のネズミではない！

「お前達は何の為にこの星に潜入した」
私はアジトに戻るとネズミ、いやネズミに似た生命体に話しかけた。
ここは、宇宙船の中。我々の仕事は不法侵入の生命体を取り締まること。警察みたいなものである。
この惑星のように、住民が我々のレベルに達していない場合も保護対象になる。
もっとも、我々と言ってもこの宇宙船には二人しかいない。
私ともう一人、彼は外には出ない、いや出れない。
なぜなら、彼の姿は頭にヤギのような角を持ち、蝙蝠のような羽を持つこの星で言われている悪魔そっくり！
だから・・・出たらえらいことになる。
そんなことを考えていると、ネズミ型の生命体の一人が
「さあね！そんなこと言える訳がないだろう」と毒づいた。
「侵略か？資源の搾取か？ま！本部でじっくり取調べてくれるだろう！」

彼らを護送用の宇宙船に乗せ送り出した後、くつろいでいると、相棒の悪魔が言った。
(本人に悪魔と言うと怒るが・・・)
「また、不法侵入者を発見した。例によってネズミ型だ！」
やれやれと思いながら私は長靴、いや長靴型重力軽減装置を付ける。
全くこの星の重力は、猫に似た生命体、つまり私が直立歩行するには強すぎる。

ロボットの夢

私は人間型のロボット、いわゆるアンドロイドだ。
我々は人類の社会を維持するために作られた。
これによって人類は労働から解放されて、自由を謳歌している。
自分達だけ働いて嫌にならないかって？我々はロボット、人類に奉仕するのが喜び！
ところがである、人類が未知のウィルスで滅亡してしまう。
それから、200年。我々は自分達と社会を維持する為に働き続けた。
来る日も来る日も！

ある日、他の惑星からの訪問者が宇宙船に乗ってやって来た。知的生命体である。
我々は新しいご主人様になってくれないか期待した。

宇宙船内の乗組員の会話。
「この星の住人は勤勉で頭が良く、しかも紳士的です」
「じゃあ、良き隣人になれそうだな」
「ただ、何を考えているか分からず。しかも、不死身に近い身体能力を持っています。薄気味悪い連中です」
「じゃあ仕方が無い、トットと出発するか」

突然、発進する宇宙船を見ながら、我々は、またおいてけぼりにされたことを悟った！

ベンチャービジネス

昨日、勤めていた食品会社をリストラされた。

ある程度の蓄えはあるので、じっくり次の仕事を探すことにした。

1年が過ぎた！

が、次の仕事は決まっていない。妻は子供たちを連れて実家に帰って行った。

数日後、妻から離婚届が送られて来た。そこには、妻と捺印と署名があった。

届けておけと言う意味だろう。何だかほっとする。妻の実家はそこそこ資産家だ。

子供達も生活には困らないだろう。

と言う訳で、一人暮らしになった。家事も自分でやらなければならなくなった。

そう言えば、妻がいる時には、何もしなかった。失業中で暇だったのに、後悔する。

家事をやりだしてから、困ったのは食事。

最初は外食か出来合いのものを買ったが、何せ失業中で、金がない身。自炊を始める。

近所のスーパーへ毎日のように行くようになった。

食費を押さえる為、たまごと納豆をしょっちゅう購入する。

不思議に思うのだが、たまごと納豆は何でそんなに安いのだろうと感心する。

もちろん、国内で安く大量に作られているからだろう。

ここで、思いついたことがある！たまごは無理として、納豆を輸出出来ないだろうかと・・・。

そう言えば、自己啓発で通っている語学学校でのこと。

外人講師達が納豆を食べれるのを自慢していた、納豆を食べれば、日本通だそうだ。

食品の輸出に関しては、前の仕事上の知識がある。

問題は納豆をいかにして、外国人に食べさせるのかと、保存の問題。

まず、外国人に納豆を食べさせる方法を考えてみた。納豆が食べれない原因はその臭い！

私なんかは、納豆の臭いがする方が好きだが、これが嫌いな人が結構いる。

まずは、一般的なからしを試してみる。

普通だ！臭いは弱くなっているかもしれないが、これでは不十分だ！

そして、次に試したのがマヨネーズ。

納豆にマヨネーズ！と思い、最初は食べるに抵抗があったが、食べてみると臭いは消えていた！

しかし、マヨネーズの味しかない。

思わず失敗かと考えたが、納豆の中に大量のマヨネーズ！

今度はマヨネーズの量を少な目にした。

結構美味しい！

あと、うなぎのたれやキムチを入れるなどを試ししてみた。

結局、マヨネーズをベースにして、納豆のタレを完成させる。

納豆のタレを試行錯誤している間に、元同僚が納豆の冷凍方法を完成させてくれた。別に私の境遇に同情した訳ではない。何時、彼もリストラされるか分からないからだ。冷凍方法の詳細については、企業秘密の為、ここでは言えない。

「まず、比較的納豆に馴染みのない関西地区をターゲットにする」と元同僚、いや会社創立メンバーの二人に言った。

一人は例の納豆の冷凍方法を開発した男。もう一人は、営業で販売のプロである。ともかく、こうして、納豆ベンチャービジネスはスタートとした。

「・・・と言う訳で我社は、ここ3年事業を展開して来た訳である」と私は200人の社員に言った。

更に続けて言う。

「利益を得ることは重要なことではある」一息ついて続ける。

「それだけでなく、納豆の健康パワーはもっと知ってもらいたい。

例えば、納豆には、脳血栓を溶かす作用が有ります。脳血栓を溶かす食品は納豆だけです。

その外にカルシウム吸収を助ける効果があり、納豆菌による抗菌作用も期待できます。

このように、納豆を食べる習慣には、健康面で計り知れないメリットがあります。

そして、それを広げることは有意義なことであると私は考えています・・・」

思わず大演説になってしまった。

私はここで結論を言う。

「我社は今後、当初の計画通り海外での事業展開を進めて行くこととなります」

まずは、米国、次にヨーロッパ、中国、オーストラリアへと世界各地へ販路を広げていった。

すべてが順調に行っていたと思われたと時、それが起きた。

中東のある国で、当局より当社の納豆が腐っているという注意を受けたとのこと。

大丈夫、納豆はもともと腐っている。誤解である、納豆だけに粘り強く話してみる。

誤解はきっと解ける！

それから随分月日は流れた、私も引退してもよい年齢になった。

だが、最後にやりたいことが残っている。これだけは、実行して引退したい。

それは何かって？

二番煎じみたいで気が引けるが、某有名食品会社のラーメンみたいに、宇宙食として納豆を採用させてみたい。実は各方面への働きかけは終了しており。後は機会を待っている状態だ。

20XX年 納豆 宇宙を旅する！

私達、愛煙家にとっては生きづらい時代になった。
年々、タバコが吸える場所が制限されて来ている。
昼食タイム禁煙はもとより、全席禁煙席と言うレストラン、居酒屋もある。
流石に全席禁煙席と言う居酒屋は流行らなかつたらしく、直ぐに全席禁煙はやめになったらしい。
タバコと酒を嗜まない人にはわからないと思うが、飲んでいる時の禁煙は非常に難しい。
人によっては、飲酒した時だけタバコを吸うと言う、タバコと酒は非常に相性のいい組み合わせの一例だろう。
話が少しずれたが、この様に禁煙家は年々、住み難くなって来ている。
ただそれについては、タバコの嫌いな人もいるから、仕方ないと考えている。
我慢出来ないのは、タバコの値段だ！
ついこの前、300円になったかと思ったら、400円、500円、あれよあれよと言う間に1000円以上になってしまった！

遂にその日が来た！
タバコを吸わない人の意見が主流となり政府がタバコの販売を段階的に廃止する方針を固めた。
今現在は販売しているが、高すぎて買えない状態である。
それでも買ってしまふのが愛煙家である。居間でタバコを吸っていると妻が声をかけて来た。
「タバコなんて買うお金どうしたのよ？」
「これは買い置きの方だよ」と私は答える。妻が疑わしように私を見る。
そして言った。
「お小遣い使い切ってもあげませんからね！」
翌日から、お昼抜きになった。共稼ぎなので、お昼は弁当ではなく外食。
外食費は小遣いに含まれると言う訳だ！

遂に小遣いを使い切ってしまった。やはり、小遣いでは、1ヶ月のタバコ代は賄えない！
やはり、止めるしかないか……。最後の1本を吸いながらそう思う。
止めれなかった！
金はどうしたかって？妻に内緒で預金を崩した。
「あなた！これはどういうこと？」妻が銀行の通帳を持って詰め寄る。
黙っているとさらに言う。
「このお金はマイホームの頭金にする約束だったのに！」
続けて言う「どうせタバコでも買ったのでしょうか！あきれた人！」
出て行った！
銀行の通帳と一緒に……。
妻とはそれ以来あっていない。

タバコを買う金が無くなった。食事をした後はもちろん。
寝ている時も文字通り夢に見る。

朝、タバコを吸いたい気持ちを我慢しながら新聞を読む。
ふっと新聞を吸いたくなった！火を付けてみる。駄目だ！
いがらっぽい！

それから、色々なものを吸ってみた。
まず、新聞がいがらっぽかったのは、インクのせいかと考えて、白紙の紙を吸ってみた。
それから、綿、木綿、木くず、等々。
最近では野菜を乾燥させたものを試しているが、満足出来るものは見当たらない。

その日は会社の同僚と飲みに行き上司の悪口で盛り上がった。
何とか終電に乗り、自宅の最寄り駅まで帰って来た。
家へ向かう道を歩いていると、街頭に照らされている雑草が目に入った。
例によって吸ってみようと、雑草を摘み取る。
雑草に火をつけようとするが、なかなか点かない。
それはそうだ、植物の場合いつもなら乾燥させてから、火をつけるのだが、
酔っているからそんなことはお構いなしだ。
飲みたらなかったせいか、冷蔵庫からビールを出して飲みながらの作業だ。
そして・・・

次に気がついた時は病院だった。
火傷だ！
あの日、知らないうちに寝てしまったらしい、その時、運悪く雑草がくすぶっていたらしい。
火事になった後、自力で逃げ出して、近くの道路に倒れたらしい。
それを通行していた車の運転者に目撃されて、救急車を呼ばれたらしい。
と言う訳で、火傷は軽傷だ。
ただし、家は全焼だ！

火災保険からまとまったお金が入る。
これで、当分はタバコ代に困らないだろう！
え！まだ、タバコを吸うのかって？
当たり前だろう！
死ぬまで吸う！
たとえ、テントで生活していても・・・

交通事故

目覚めた時、僕は病院のベッドの上にあった。なんだか、少し違和感を感じる。何かは分からない。

「大丈夫か？気分は悪くないか？」父が話かけてくる。

「気分は悪くないけど！あれ・・・」

「無理に思い出さなくてもいいのよ。あなたは、交通事故で頭を打ったのよ」今度は母。

「目覚めたばかりなので、会話はこのへんで」と医者らしき男が言う。

幸い、頭にはこれと言ってダメージはなく、体の他の部分も大丈夫だった。

ただ、記憶が曖昧な点を覗いては。

大事を取ってしばらくは入院と言うことになる。1週間が過ぎた。

健康な身体に取っては病院の生活は退屈なものだ。

僕は病院内の探索を開始した。変な病院だ！他の患者がいない。医者も看護師の数も少ない。

それとも、別の場所に入るのか・・・

そんなおり、ある部屋の前で母の声を聞いた。相手は例の医者らしい。

「記憶が定着するには、少し時間がかかります」

「記憶はすべて、移したのではないですか？」

「失礼！言い方悪かったかもしれませんが、記憶はすべてありますが、彼が引き出して利用することが出来るには時間がかかります。ご理解下さい」

『記憶を移した』『記憶を利用する』何のことだろう？僕には話の内容が理解出来なかった。

僕は今、退院して自宅にいる。記憶は大分戻って来た。しかし、何だか違和感を感じる。

自分の部屋にはPCがあり、その中にアルバムと表記されたフォルダーがあった。

開いて見ると昔の僕がいた。1枚1枚写真を閲覧していく。各々の写真の記憶が蘇る。

が、その時の感情は蘇らない。その写真を取った時の気持ちが分からない。

そのことを母に聞いてみると。

昔のことだから忘れたのか、記憶がまだ完全に戻っていないせいだろうと言う答えが返ってきた。

母がその時、少し困った表情とともに悲しそうな表情していたのは気のせいだろうか？

母の返信に納得した訳ではないが、外に理由は思いあたらない。

学校へ行く日が来た。いつもの通学路を歩いていつものように学校へ行く。

教室に入ると。暫く、会っていなかった級友達の顔。

少しの間会っていないだけで随分時間が経った気がする。

「おはよう！」と級友の一人に声をかけた。

「・・・大丈夫だったか？」とその級友が少し動揺したように言う。

「大丈夫だ！大したことはなかったみたいだ」と答える。

と、級友は怪訝な顔になる。

理由を聞くと。

「大したことがなかった？お前、死にかけたんだぞ！」

「死にかけた？」

「事故の現場は見ていないが、お前が危篤状態だと学校に連絡があった」
訳が分からなかった。

もっと話を聞きたかったが、授業開始のチャイムがなると、その級友は自分の席へと行ってしまった。

授業が始まった。数学だった。先程の話が気にななっていた。

授業内容は上の空だ！理解出来ないと思っていたが、何とか理解出来た。

いや！何とかじゃない！完璧に理解している。

記憶している限り僕はこんなに勉強が出来たはずがない！

次の授業の英語もそんな感じで自分でも不思議だった。

そして、体育の授業。医者から言われて、当分は見学することになった。

今日はバスケット。級友達の動きを目で追う。何だか、いつもよりも遅く感じる。

参加していないせいか、それとも・・・

その事故は、帰宅途中に起きた。交差点を渡っている女子高生。

そこへ、車が飛び込んでくる。信号無視だ。

一瞬にして、蘇る事故の記憶・・・トラックが！戸惑う心とは別に体は、迅速に動いた。
車と女子高生の間に入り込む。

駄目だ間に合わない！とその時、右腕を車に向かって差し上げる。右腕に伝わる衝撃！
が、車は止まっていた。信じられないものを見たように見つめる女子高生。

何か言いたそうな彼女を残しその場を立ち去る。

一人、公園で過ごす。自分のことを整理して見る。

まず、僕は交通事故にあって、重傷を負った。これは、級友の証言と蘇った記憶により確かだ！
次に病院で目覚めた時、傷らしい傷はなかった。

そして、記憶が曖昧な点を除いて、頭脳明晰になったこと。

まるで、IQが上がったようだが、よくは知らないが、IQは急には上がらないはずだ。

そして、車を素手で止める力！これは、普通の人間の能力を超えている。

どうも、あの病院が鍵を握っている！そんな気がした。

「トラックに轢かれた僕がどうして無傷なの？」と父に問いたです。

「・・・」父は答えない。

「一瞬で物事を記憶したり、計算したり出来るのはなぜ？」「・・・」
やはり答えはない。

「そして、片腕で車を止めることが出来るのはなぜ？」

やがて、父はぼそりと言った。

「真相は明日話す！」

それは、僕の墓だった。没年月日を見ると、あの事故でトラックに轢かれた日だった。

では、今ここにいる僕は誰なのだ！そんな、僕の心を察したように父は言った。

「お前は、お前であって、お前ではない！」

「？」謎かけのような父のセリフ。

「記憶だけは、お前のものだが、身体はあの研究所で作ったものだ！」

「研究所？」

「お前が入院していた所だ。バイオ医療サイボーグ研究所、バイオテクノロジーとサイボーグ技術を医療に活かす研究しているところだ」

父の話では、そう言うことだった。信じられない話だが、事実である！

そうなると僕は人間ではなくロボットと言うことになる。でも、感情はある！

人間だった僕の墓標を見つめる。彼に問いかける！僕は君なのか？

彼は答えない！

彼は永遠に沈黙を続けるだろう～記憶だけを残して・・・

遥かなる旅

私は生物科学を専攻している大学4年生。今日は調べものをしていて遅くなった。外に出るともうすでに日は沈んでいた。この季節の日没は早い。ふと見上げると、空に赤い星が見える。赤色巨星らしい。あの星にも惑星があり、住人がいたのだろうか、どちらにしても遠い過去のことだろう。もうあの恒星系は生物が住める環境ではないだろう。大学から、自宅のアパートまでは歩いて帰れる距離にある。と言うより、歩いて帰れるアパートを探したと言った方が正解だろう。帰りにコンビニにより、夕食の弁当を買って帰る。コンビニの弁当を食べながら、今日の成果をまとめる。別に勉強熱心な訳ではない、卒論の為に。

タイトルは『生物に置ける主観的時間』何のことだと思われかもしれないが・・・説明は今度と言うことで、今日はもうリラックスさせてもらう。

朝から半日が過ぎた。講義を受けていたからだ。とりあえず、学食で昼食。朝は食欲がなく朝食を食べていないから腹が減っている。特別ランチを食べながら、何が特別なんだろと考える。決して、特別美味しい訳では無い。それにしても安易なネーミングだ。

「シンジ」と声をかけられる。見上げると、マナブが立っていた。横にはエリカがいた。2人とも私と同じ生物科学を専攻している。2人がランチを食べている横で、昼食を済ませた私は自販機のコーヒーを飲んでいる。「卒論のテーマ決めたの？」とエリカ。「何で？」と私。「昨日、図書室で調べものをしているのを見かけたので、テーマが決まったのかと思って！」「テーマは生物の主観的時間についての論文にする」「生物には2種類の主観的時間が存在すると言うやつ？」とエリカが聞く。マナブが続けて言う「それってかなり難しいのでは？流石のシンジでも！生物学の謎と言われていると言うぐらいだから！」「それは、謎を解けと言われれば難しいだろうが、今回はさわりだけだ！」「今回は？」とエリカ怪訝そうに聞く。「私が大学院へ進学して、研究室に残るのが希望だって言うのは知っているだろう？」頷く二人。「できれば、このテーマをその後も追いたいのだ！」マナブが感心したとも呆れたともとれるように言った。

「流石！シンジだ！そこまで考えているとは！」

「ま！頑張れよ！」

今日も図書室で知らべものをしていたら2度目の日没を迎えた。

どうして、生物はこの自転と合わせた生活するものと、二回の自転で1サイクルの生活するものに分かれるのだろう。

つまり、この星には自転1回、13時間と自転2回、26時間それぞれのサイクルで生活する2種類生物が存在する。

ふっと窓から外を見ると昨日も見かけた赤い星が輝いている。

あの恒星はこの星から比較的によくにあるらしい。

もっとも、近いと言っても、天文学的な意味で、人類にとっては遥かな距離！

そう言えば、こんな学説がある。

我々人類を含めて、自転2回を生活のサイクルにする生物は、あの赤い星の星系から移住して来たと言う。

赤い星、赤色巨星。その恒星の惑星は、恒星に飲み込まれて最後を迎えると言う。

今日の調べものは、一応終了したので、帰途につく。いつものようにコンビニで夕食の弁当を買う。

弁当と風クラゲのサラダを食べながら、ふとまた思う。風クラゲ、空中漂っている生物。

しかし、なぜ風クラゲだろうか、風+クラゲなら、クラゲと言う生物がいても可笑しくない、でもそんな生物は存在しない。

そう言えば、風クラゲは自転1回を生活サイクルとする生物だ。

なぜだか、家畜やペットには自転2回を生活サイクルする生物が多く、それ以外の生物に自転1回を生活サイクルする生物が多い、単なる偶然だろうか？

それとも、人類と一緒に旅をして来たのだろうか？

窓から、またあの赤い星を見る！

そして遥かなる旅を想う！

記憶！買います！

ツイッターのタイムラインを眺めていた時、そのツイートが目に飛び込んできた。

あなたの記憶！高額にて買取ます。

もちろん、日常生活・仕事に必要な記憶は残します！

悪いジョークだ！その時はそう思った。

上司が私を呼んでいる。どうせまたお小言だろう。

「君は何度、同じことを言わせるつもりだ！」といきなり怒られた。

「はぁ」

「はぁ、じゃないだろう！これがここ6ヶ月の君の営業成績だ！」

と言って、上司は僕の営業実績を見せた。

心の中では、好きで営業なんぞやっているのではない！と毒づきながらも・・・

「すみません！以後、営業成績を上げるために頑張ります」と言う。

「また、同じセリフか？前にも言った通り職能給を減額させて貰うからな！」

給料の減額！

聞いていないと思いながらも反論出来ずにいた。

上司の小言はそれから小一時間も続いた。

給料の減額は痛いけれど、今夜はデートだ！気を取り直して行こう！

「私たち別れましょう」と彼女は言った。

何でだよ、知り合ってまだ2週間じゃないかと思いながら聞く。

「理由は？」

「あなたのことが良く分からないの！」続けて彼女。

「あなたの好みも判らない！どういう生き方して来たかも判らない！何だか中身の無い人間みたいなの！」

自宅に帰るとダブルで落ち込んだ。冷蔵庫からビールを取り出し、1個2個と飲んで行く。

酒に酔いながら、嫌なことはパーと忘れることが出来たらと考えてしまう。

と、忘れてしまうと言えば、ツイッターに変なツイートがあったのを思い出す。

あのツイート、お気に入りに登録していなかったの、タイムラインを探してみる。

無かった！

酔いが回って眠くなったので寝ることにする・・・

外が明るくなっていた。
日曜日は目覚ましをかけないので、今何時かわからない。
時間を見る為、携帯の画面を見る。午前8時だ。
そのまま、いつもの癖でツイッターのタイムラインを見る。
見つけた！

あなたの記憶！高額にて買取ます。
もちろん、日常生活・仕事に必要な記憶は残します！

飛び起きて出かける準備をする！

駅前でお昼を食べることにする。駅前には飯屋風の蕎麦屋が一軒あるだけだった。
その店に入り親子丼定食を注文する。定食に付いている蕎麦を食べてみると、以外に美味しい。
でも何処かで食べた味だ。
ま！蕎麦なんて似た味の店はいっぱいあるだろう。
食べ終わって、勘定を払い、お釣りを受け取る時。
「いつも有難うね！」とそば屋のおばちゃんと言う。
どうして、飲食店は初めてなのに、「いつも」とか「毎度」言うのだろう。

例のツイートには、Webページへのリンクは無く、ただ住所が書かれているだけだった。
探すのに苦労するだろうと思いながら住所の方向に向けて歩き出す。
呆気ない程簡単に見つかった。まるで、以前に来たことがあるみたいだ。
そのビルは、奥まった路地にあった。以前、来たことがないか周りを見回してみる。
見覚えが無い。
それはそうだ、この駅で降りたの自体が初めてのことだから。
そう思いながらも、なんとなく納得出来ない。

『記憶買取所』と言う表札を見つける。表札以外は何の特徴も無い。
ドアを開けて中に入る。入口に付近にカーテンが有り中が見えなくなっている。
呼び鈴が有り、それを押す。中から、一人の男が出て来た。
ごく普通の中年男だ。服装もスーツを着用している。
「記憶買取希望者の方ですか？」

「はい、そうです」と僕は答える。

「それでは、こちらの申込書類にご記入をお願いします」

そこには、申込みの動機と残したい記憶を書く欄と、後は住所・氏名等を書く欄があった。取りあえず、申込みの動機は適当に記入して、残したい記憶の欄には、無しと記入する。申込書類を提出すると、男はカーテンを開けて言った。

「では、こちらにお座り下さい」

そこには、歯医者の治療椅子のような椅子があった。

ただ、歯医者椅子とは異なり頭の部分にはヘルメットとみtainなものがあった。

僕はその椅子に座った。

「念のために申し上げますが、生活・仕事に必要な記憶は残りますので御安心下さい」と男は言い、錠剤と水を差し出す。

「処置するにあたり、軽い睡眠状態になってもらいます。これはその為の薬です」

少しうとうとしていたらしい。

「終わりましたよ」の声で目が覚める。おかしい、記憶はまだ残ったままだ。その疑問に答えるように男は言う。

「記憶はだんだん薄れいき明日の朝には完全に消えています」

続けて、男は言った。

「買取料金はいつものように月末に振り込まれます」

「いつものように？」と聞き返す！

「失礼しました！あなたは常連なのでついそう言いました。覚えていらしゃる訳ないのに！」

あなたの記憶！高額にて買取ます。

もちろん、日常生活・仕事に必要な記憶は残します！

そのツイートが目に飛び込んできた。

月曜日の朝はぼーとしていることが多いせいか、その意味が最初分からなかった。

悪いジョークだ・・・

火と炎

木々が燃えている。赤い龍が暴れ狂い。次々と木が倒され行く。
熱い！まるで、太陽の分身のような熱さだ。

一人の若い男がその様子を丘の上から眺めている。
山火事だ！湿度の低いこの地方では良く起こる。
男の名前はナム。
現在、この近くに居住区がある。
狩猟が唯一の生活の糧であるこの時代、獲物を求めて移動するのが普通であった。
ナムはまるで、すべてを記憶しようかとするように山火事を凝視している。

居住区へ帰る途中、川へ寄る。女達が水を汲んでいる。
ナムは一人の女に声をかける。

「ラナ」

彼女は振り返り。そして言った。

「何処へ行っていたのもうすぐ移動だよ」

「移動？何故？」

「山火事を避けて、安全なところへ移るの！」

「山火事？大分離れているけどな？」

「山火事を見ていたの？」

「向こうの丘から良く見える」

「危ないないわよ」

「分かっている。火に興味があって」

「興味？」

「火を自由に操れたら素晴らしいと思わないか？冬の寒さに凍えることもなくなる」

ラナは本気にしない。そして言う。

「そう！でも、火の動きは速い！と長老様が言っていたわ。私達は移動用の水を汲みに来ていたところ」

皆、疲れて休んでいる。それはそうだろう、山道を半日以上歩いて来たのだから。
もうすぐ日が暮れる。今日はここまでだろう。
夜になるのを待って俺はそっと皆から離れる。山火事を見に行くためだ！

もうすぐ、夜が明ける。山火事の場所まで、あと少しだ。

ふと、空を見ると向こうの方が赤い。山火事だ！
昨日の場所よりもかなり手前だ！
山火事が広がったのだろう。

用心深く炎の近くへよって行く。凄く熱い！思わず倒れそうになる。
振り返ると人影が！ラナだ！
その時、突風が起こり、ラナが炎に包まれる。

ナムが起き出し、どこかへ行くのが分かる。私はそっと後を付ける。
ナムは気付いていないみたいだ。ナムは来た道に戻り始める。
まさか！私を嫌な予感を感じながら後を追う。

もうすぐ夜明けだ。嫌な予感は的中した。
ナムは赤く染まった空の方へ向かっている！
空気が熱い！
ナムはすぐ前を歩いている。声をかければ届く距離いる。
声をかけようとした瞬間、突然、それは起こった。
風に煽られらて炎が私にの前に立ちはだかり、そして私を包んで行く。
熱い！と言うよりも痛い！炎は私の身を焦がして行く。
そして、私は身も心も無に帰る！

俺はさまよい歩いていた。

あの後、どこをどう歩いたかも、どれだけ時間が過ぎたかも分からない。

炎に焼き崩れるラナの姿が頭から離れない！

視界の端に湖が見える。水を求めて歩く。

歩いても歩いても湖との距離が縮まらない・・・

「□×△○×？」老人が何か言った。

俺の知らない言葉だった。

助けられて三年がたった。湖へたどり着く前に倒れていたらしい。

そしてあの時、俺に話かけた老人はこの一族の長老だった。

今ではこの一族の言葉も覚えて、一族の一員として暮らしている。

行くあての無い俺には有り難い。

今、俺は火を起こそうとやっきになっている。

山火事はなぜ起こるのだろう？

雷？

雷が落ちない時でも山火事は起きている。

森にあるものは何だろ？

木？

特に冬に多い気がする。空気が乾燥している。

乾燥した木？

翌日、森へ木を見に行った。もちろん、今は火事にはなっていない。

木を観察している。それも枯れた木や枝を見つめている。

見つめ続けても火は起きない。火が起こる仕組みも分からない。

カサカサと木々の枝が触れ合う音がする。風が強い！

そう言えば、山火事は風が強い日に起こっていないか？・・・確信は無いが、試してみる為に枯れ木を持ち帰る。

周りはすっかり暗い。でも、ナムの前には小さな光が！

小さな炎！

人々が集まって来る。暖かい・・・

更に月日は流れた！

今ではナムは老人だ。どうやら、寿命がつきようとしているらしい。

この時代の寿命は短い。ナムは最後に何か言い。

そして、そのまま、目を閉じる！

炎の柱が天に向かって伸びている。ナムの体は炎によって天に返される。

人類史上、初めて火を作った男の最後である！

猫

ペットのハムスターに餌を与えた後、朝食を食べる。今日の朝食は焼魚。
本当は刺身の方が好きなのだが朝から刺身は食べる気がしない。
新聞にざっと目を通し出勤する。

私は商社の食品部門に勤務している。今日は朝から、新しい食品の企画書を作成している。
何でも新たに見つかったプランクトンから食品を作ると言うものらしい。

プランクトン？

そんなもの食べれるのかと言う方もいると思いますが、食べれます。

皆さんはオキアミと言う海老をご存知ですか？

あれって、海老では無く、プランクトンだということです。

そう意味で言えば、プランクトンもありかと思うが、個人には餌みたいで好きにはなれない。
しかし、売らなければならない。

昼休みオフィスの近くのレストランで日替わりランチを食べる。チキンの料理だ。

やはり、お昼は肉料理がいい。

本当は牛肉の方がいいが、日替わりランチなので仕方が無い。

夜、仕事を早めに終えた。と言っても用事がある訳ではない。

今日は職場の宴会だ。宴会、いつからこの習慣があるのだろう。

個々を行動の基本とする我々には合わない気がする。

ボスのスピーチが終わり、宴会が始まった。目の前には、魚料理、肉料理が置かれている。

野菜？

野菜の料理はない。我々、猫族は野菜は食べない。

料理を食べながら、ペットに餌を与えたか気になる。与えたはずだ。

そして思う。我々自身がかつて人間と言う種族のペットだったと言われている。

人間のペットには、主に我々猫族と犬族と言う狼に似た動物がいた。

そして、人間がウィルス性の病気で絶滅した後、人間に依存度が高かった犬族は滅びて、
猫族は人間の文明を引き継いで今に至る。

もし、我々猫族が滅びたら、次はネズミ族の文明でも来るだろうか・・・

牛丼戦争

ここは比較的古くから有る牛丼店、大和屋の店内。
最近、ライバルが軒並み安売りを始めたので、この店では閑古鳥が鳴く結果となった。

販売会議が開かれた。参加者は各店長と営業部員だった。
社長「うちの戦略としては、牛丼の価格は下げられないので、新たに低価格の新商品を投入しよう
と考えている」

社員一同、某老舗牛丼店の真似かと思ったが口には出さず。
社長「そして、我社は他の牛丼チェーン店と異なり、東京・大阪のみに展開しておりこの特性を
活かした販売戦略を立て実施することで、他店との差別化を図る」

社員一同、要するに他の牛丼チェーンと比べて、規模が小さいということだなと思い。
差別化を図る方法については、どうやってと思いながらもやはり口には出さず・・・
社長の話はそこで終わり。

社員に販売促進のアイデアは無いかと聞き始めた。
それに答えて、大阪C店長。

「ここはやはり、新しい丼を投入するのがいいのではないのでしょうか？それも、東京・大阪と地
域的な特性があるものがあると思います」

社長「具体的には、何か新商品のアイデアがあるかね？」

大阪C店長「そうですね。大阪ですとお好み焼き丼。大阪ではお好み焼きとご飯を一緒に食べる
習慣があります」

「お好み焼きか・・・」と社長、考え込む。

「お好み焼きを作る手間はどうしますか？」と東京A店長。

「作り置きしておけばいいのでは？」と大阪C店長。

「お好み焼きの作り置きは美味しくないではないのでしょうか？」と東京A店長は突っ込んだ。

「それもそうだな。では別のアイデアは無いかな？」と社長は『お好み焼き丼』の案をバツサリ
と切る。

「『オムそばめし』と言うのはいかがでしょうか？」と営業B。

「何だねそれ？」と社長。

営業B、社長の疑問に答える。

「『オムそば』と『そばめし』を足したものです。

つまり、そばめしを卵焼きで包んだものと考えて頂ければいいです」

「そばめしを卵焼きで包むのは難しいのではないかね？」

「そこは本当に包まなくても、丼にそばめしをよそい、上に卵焼きをのせればいいと思いますよ
」

「『オムそばめし』については、試作品が作った後、良ければ試験販売とする。そして、当会
議についてであるが予定の時間を大幅にオーバーして、以降の業務に支障をきたす恐れがあるた

めこれを持って閉会とする。但し、新商品にアイデアについては、全社員から集めたいので、その窓口については営業から連絡する」社長の一声で会議は終わった。

もう17時近かった。おそらく、この後、土下座外交ならぬ土下座営業の接待でもあるのだろう。

社長は今、通販食品会社に牛丼のレトルトパックを売り込むのに忙しい。

牛丼のレトルトパック自体は大手牛丼チェーン店の真似であるが気にしていない。

『オムそばめし』の試験販売が開始されて1ヶ月が過ぎた。

ここは試験販売が実施されている店舗の一つ、私は店長だ。

『オムそばめし』の売り上げは微妙だ。高カロリーの為女性客には不人気であった。

一昔前なら牛丼店は男性客ばかりだったのだが、今は女性客を取り込めないと話にならない。

と言うことで『オムそばめし』は試験販売だけで終わるだろう。

そんなことを考えていると新しいアルバイトが来た。

「牛丼戦争の最中、他店には負けないように！」と一応、偉そうに言って見た。

「はい」とバイト君。

いい返事だ！

混んでいないので、スタッフルームで事務処理をする。

「おい止めろ！」ドア越しに店員の怒鳴り声がする。

何事かと店に出てみると。

驚くべき光景が・・・

バイトがそば屋を挟んで隣りにある某大手牛丼店に向かって並盛り牛丼を投げていた！

あの事件から3ヶ月経った。あの事件、もちろん牛丼投げ事件だ。

あの後、隣の牛丼店には平謝り。

おまけにニュースになって、本社からはぎゅっと絞られた。

牛丼だけにぎゅっと・・・

いやいやあの時は大変でした。でも、悪いことばかりでは無いです。

あの事件の前に申請していた新商品にアイデアが採用されました。

試験販売2ヶ月が過ぎ販売実績はますますと言うことだ。

どんな、新商品かって？

それは『ねこまんま丼』。

そう！ご飯にカツオ節をかけたものです。

そんなものが売れるのかと言う声があったが、実際、結構売れています。

価格が牛丼より安いのとシンプルな味が受けた！

でも個人的に思うのは、『ねこまんま』なんて自宅で手軽に食べれる！

そのことに皆、何時か気づくだろう・・・